

キャリア選択における希望に関する研究 ー女子短大生を対象にした検討ー

松尾 美香*

1. はじめに

本稿は、短期大学に在学している学生が、キャリア選択において、いかなる動機に支えられ将来の職業へと方向づけられているのだろうか、またそのキャリア選択に対してどのような要因が影響しているのかをとりわけ希望に焦点を当て、アンケート調査の分析から考察する。

自分の将来について考え悩みキャリア選択することは、その後の人生を左右する重要なライフイベントといえるだろう。大学生は職業的発達段階において探索後期に位置づけられており、この時期にある若者は、次なる仕事社会へ移行するための準備を整え、自己の生き方を選択することになる⁽¹⁾。しかし、近年、景気の後退や産業・経済の構造的変化により、大学生を取り巻く就職状況も変化し、キャリア決定を複雑で困難なものにしている。そうしたなか、希望や見通しが持てずキャリア選択が決定できないという問題が深刻化しており、学生相談機関では、キャリア選択や就職をめぐる迷いや思いが深く、自分の将来が決まらないという訴えが多く寄せられている。大学のカウンセリング室では、進路に関する相談や精神衛生や心の問題について第2位であると指摘されている⁽²⁾。

このようにキャリア選択が決定できない背景には、大学生の職業に対する意識や態度が大きく変容していることが推測できる。フリーターやニートといった勤労観や職業観に欠け、自立できない若者が増加しており、「子どもが好きだから

* Mika MATSUO 愛媛女子短期大学専任講師

教育業界に」、「海外赴任したいから商社に」といった発想で好きなものと仕事を短絡的に結びつける者も少なくない。また、大学を卒業して仕事に就いたとしても「こんなはずでなかった」と辞めてしまう若者の早期離職は増加傾向にあり、最近では新卒大学生の約3割が就職後3年以内離職している。そのため、将来に対する「夢」や「希望」を喪失し、働く意義を見出せず、学校を卒業しても定着しない若者の増加が懸念されている。しかし、やりがいのある仕事についている人は、小さい頃に希望する職業を持っていた人の方が持っていなかった人に比べて多く、人生を「とても幸福」と感じている人は、過去になりたい職業を具体的に持っていた人が多いという。⁽⁴⁾

これまでの職業教育に関する研究では、学校におけるキャリア教育実践状況や⁽⁵⁾教育的意義を検証する研究、⁽⁶⁾早期離職への学卒時の労働市場の影響における研究⁽⁷⁾はあるものの、早期離職とキャリア教育や就職支援との関係では、実証的な研究は非常に少ない。そのため、キャリア教育に関する研究の蓄積も少ないことから、教育成果を測定・評価し情報を共有化するための基盤が遅れている。また、希望とキャリア選択との関係性に関する研究は皆無に等しい。その理由として考えられるのは、希望やキャリア教育に関する研究が最近になって取り組み始められたからである。「希望」は、人が生きていくうえで必要不可欠なものであり、僅かであるが心理学や労働経済学の分野に見られる。これらの研究分野では、高齢者を対象にした「希望の保有に生じる感情」の予備的研究や特定の地域を対象に⁽⁸⁾「希望と社会の相互関係」の実態調査が報告されている。希望とは、「来るべき未来の状況に明るさがあるという感知に伴う快調をおびた感情」⁽¹⁰⁾と定義的な表現があるものの、「感情」として捉えられるのか、あるいは「認知」として捉えられるのかをめぐる議論がなされており、今後検討すべき課題とされている。いずれの研究も、感情や社会との関係における調査に留まっている。

一方、大学教育において、キャリア教育の展開は基本的な責務の1つであり、学生から社会人への移行を円滑化するための支援がこれまで以上に求められている。これまで大学が提供してきた就職活動の支援は、採用情報の提示、試験や面接の対策といった内定を勝ち取るための実践面に主力が注がれていた。そのため、多くの学生は、職業意識が未形成なまま就職活動を行うことで、職業の未決定や働き始めてからの不適応、あるいは早期離退職などという問題を引き起こしてい

るのだろう。職業選択は青年期にかけて次第に明確化される自己概念が職業世界に表出する課程である。Erikson(Erikson1902～1994)によれば、職業決定は、青年期後期のもっとも重要な課題であり、乳幼児期から漸次形成されてきた多数の同一化群が、青年期に社会的役割の獲得という形で統合されるという⁽¹⁾。したがって、大学生の職業意識や態度について理解が促されるよう資料や情報が拡充することが必要である。

以上のような問題状況のなかで、今や学生のキャリア支援の取り組みを改めて大学教育の基本的目標のひとつとして位置づけ直す必要性から、本稿では、女子短大生を対象にしたアンケート調査をもとに考察を行う。女子短大生は、2年間という短い期間に技能と知識を身につけ、資格を取得することによって、自信と将来への夢や希望につながりやすいと考える。そして、とりわけ女性は結婚、出産等のライフイベントが考えられ、キャリア選択にも影響を与えることが推測できる。この点から女子短大生は、キャリア選択の分析に適した対象であるといえる。そこで本稿は、将来のキャリア選択の場面において学生は、どのような動機や環境が影響しているのかについて明らかにすることを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象および手続き

本稿で使用するデータのもととなる調査は、E短期大学1年生および2年生の女子学生80名を対象とし、2008年6月～7月にかけて、アンケート調査を実施した。その結果、80名(100%)から有効な回答が得られた。調査対象の属性は、付表に示す通りである。

(2) 調査項目

1) 調査対象の属性

調査対象の属性として、学年、所属コースを設けた。

2) キャリア選択に対する希望の保有に関する調査項目

希望の有無について検討する際、アンケート調査によって明らかにできるのは、個人にとっての内在的な希望の存在ではなく、あくまで希望の有無に関する表出

状況でしかない。したがって、調査において、「現在、あなたは将来に対する「希望」（将来実現してほしいこと・実現させたいこと）がありますか」という質問項目を設定し、回答形式は、「はい」「いいえ」の2件法を用いた。

3) キャリア選択に対する動機づけに関する調査項目

学生がどのような動機づけによってキャリア選択を決定しているかを確認するために、項目を設定した。動機づけには、内発的動機づけと外発的動機づけがあるが、今回は外発的動機づけに着目するため、回答形式は、「1、人」「2、テレビ」「3、インターネット」「4、本や雑誌」「5、その他」の限定回答法を用いた。

4) 生育環境の状況に関する調査項目

学生の生育環境からキャリア選択に対する希望との関連性を測定するため、玄田の知見（2006）を参考にし、家族からの期待、家族からの愛情の2項目を設定した。家族からの期待の回答形式は、「4、とても期待されていた」「3、どちらかと言えば期待されていた」「2、どちらかと言えば期待されていなかった」「1、全く期待されていなかった」の4件法を用い、家族からの愛情の回答形式は、「4、とても受けていた」「3、どちらかと言えば受けていた」「2、どちらかと言えば受けていなかった」「1、全く受けていない」の4件法を用いた。

5) 社会的ネットワークに関する調査項目

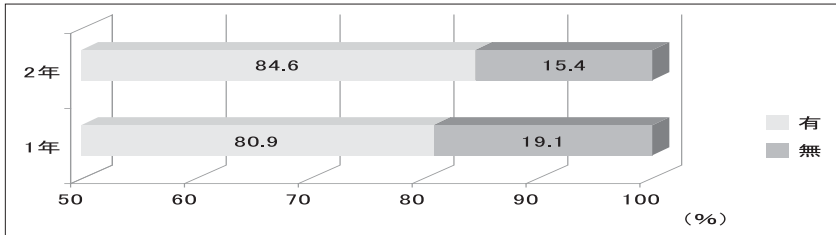
損得や利害を超えたつながりであり、自分の気持ちを投影できる存在である友人が重要であることから、友人の数を測るために、項目を設定した。回答形式については、「4、多い」「3、やや多い」「2、やや少ない」「1、少ない」の4件法を用いた。

6) 挫折経験の有無に関する調査項目

過去が現在の自分にどのように影響しているか、自分はどのようにして今の自分になったのかを評価するために、項目を設定した。回答形式については、「ある」「ない」の2件法を用いた。

3. 結果と考察

(1) 希望の保有状況

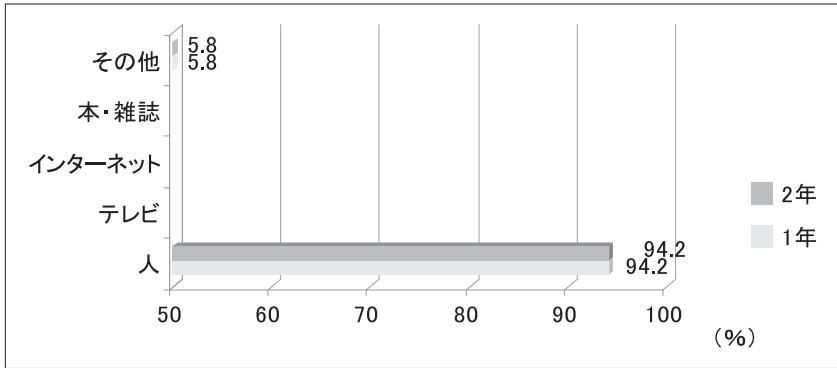


(図－1) 希望の保有状況

図－1に示すように、将来実現してほしいこと、させたいこととしての「希望」の有無をたずねると80名の全回答者のうち、1年生80.9%、2年生84.6%が「ある」と回答しており、「ない」という回答は1年生19.1%、2年生15.4%であった。約8割がなんらかの希望を保有していることから、ほとんどの学生が何らかの希望を保有していることが確認できた。現代の若者は、希望が喪失していると指摘されているが、この結果から指摘されている状況とは異なることが言えるよう。

希望の問題は、個人の問題ではなく、社会全体の「活力」や「健全さ」そして、「社会秩序」に関わってくることから、希望を抱かない者が多い社会は停滞し、墮落し「社会秩序」が保てなくなるとい⁽¹²⁾う。したがって、図－1から約2割が将来に対して、希望を抱いていないことは事実であり、この数字を過小評価すべきではないだろう。

(2) キャリア選択に対する動機づけ

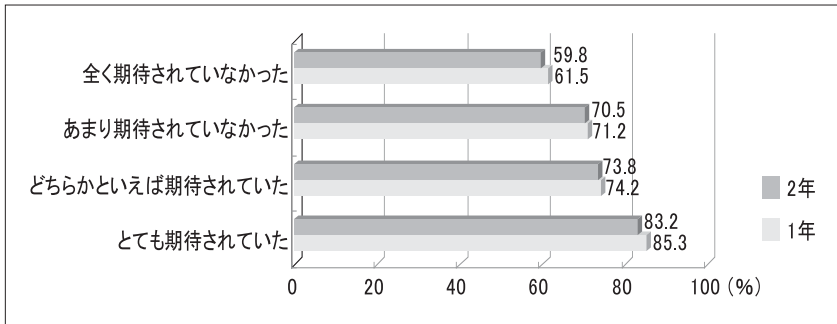


(図－2) キャリア選択に対する動機づけ

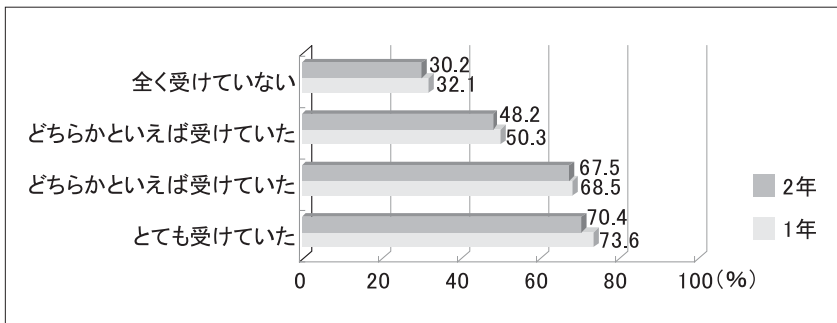
人間はもともと能動的で、外界の刺激を積極的に求めている生き物である。そのため、図－2から分かるように、人からの影響を強く受けていることがうかがえる。この学生に影響を与えた人とはどのような人間であるかを探るために、「人」と答えた学生について、どのような関係かをたずねた。その結果、友人や教師という回答が多く得られた。たとえば、部活動の先輩を見て憧れた、あるいはクラスメイトに触発されたというように、他者の存在からキャリア選択において希望をもつようである。また、教師の場合、担任、授業、部活動、生徒指導上のかかわりの場面において、キャリア選択において希望をもつようである。それは、自信を示す言葉を引き出し自己効力感を援助したり、個人の内的資源（長所）を援助したりすることが影響するのだろう。

一方、希望を現実のものとするために、本・雑誌やインターネットで情報を集めたりするものの、直接的な動機付けには至らないようであることが確認できた。

(3) 生育環境



(図－3) 子どもの頃の家族がらの期待と現在希望がある割合



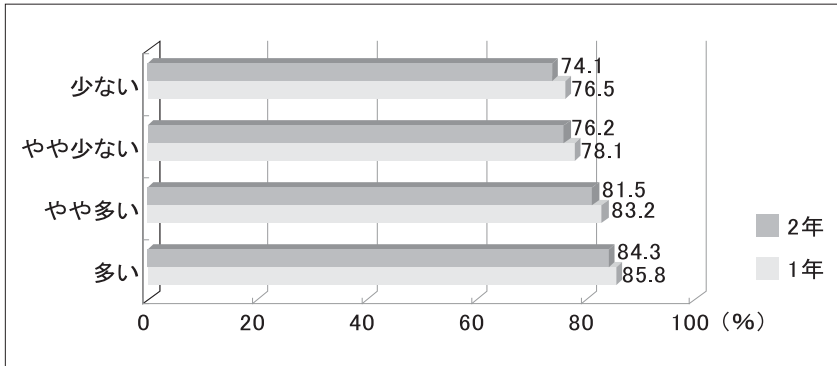
(図－4) 子どもの頃の家族の愛情と現在希望がある場合

家族から「あまり期待されていなかった」あるいは「全く期待されていなかった」のは65.7%、「期待されていた」「やや期待されていた」のは79.1%であった。家族から愛情を受けたと「どちらかといえば受けていた」「全く受けていない」のは40.2%、「受けていた」「どちらかといえば受けていた」のは70.0%である。つまり大半の学生は、子どもの頃に家族から愛情を受けたと感じていながらも、半数は家族から期待されていなかったと回答している。

家族から期待されていた学生のほうが、現在、希望を持つ割合が高い。家族から期待との関係を図示してみると、図－3のようになる。子どもの頃に家族から

期待されなかった人で希望を持っている人は1年生61.5%、2年生59.8%にとどまっているのに対して、家族から期待されていた人は1年生85.3%、2年生83.2%の人が希望を持っている。親の期待は、子どもの学習動機づけや人格に大きな影響を与えているということから、このデータにおいても20ポイントほどの違いがあることが確認できた。しかし、親や家族からの進学や就職への期待が重荷となり、希望を失ってしまうと言われるが、家族から期待されていなかったという記憶がある人は、未来への希望を見出しにくい状況である。

(4) 社会的ネットワーク



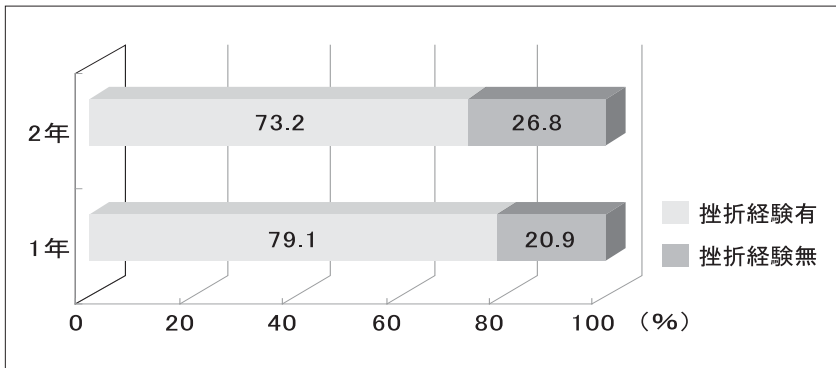
(図－5) 友人数と現在希望がある割合

私たちは家族と同様に友人の存在を必要としている。友人の存在を社会的に見直してみると、1つは交際・連れ合うこと、2つめにはサポートしてくれること、最後に最も重要なのはアイデンティティ形成を助け、地位を与えてくれることである。⁽¹⁴⁾

友人といると何となく楽しい、気が合う、ホッとするとといった友人との関係は損得や利害を超えたつながりである。私たちは社会生活を送るなかで、学生であれば学校の成績や容姿、社会人になれば仕事の評価など、社会から様々な評価を下される。しかし、友人は「自分らしい自分」「素の自分」「本当の自分」を認めてくれる。⁽¹⁵⁾ 友人からの承認が役割や立場だけでない自分という感覚を与えてくれ

るのである。だからこそ、本音を話せるのだろう。図－5を見るとわかるように、友人が多いほうが希望を持っている人の割合が高い。友人が少ない人では、希望を持っているのは70.7%に過ぎないが、友人が多い学生では83.3%にのぼる。友人は、家族からの期待を受けなかった場合の次の希望へとつながるようである。

(5) 挫折経験



(図－6) 挫折と現在希望がある割合

挫折経験があると回答しているのは、全体の8割近い79.1%であった。「挫折」は人生の経験であるので、学年が高いほうが挫折経験が多いように思えるが、予想に反して学年による差はほとんどなく、いずれの学年においても挫折経験があると答えた学生の割合は8割前後となっている。

挫折の内容については、「学習」がもっとも多く、全体の61.1%がなんらかの挫折経験があるとしており、次いで「部活動」が続いている。

4. まとめと今後の課題

本稿では、短期大学における学生を対象とした実態調査をもとに、キャリア選択と希望との関連を検証した。以下では、得られた知見を要約し、まとめとしたい。

第一に、キャリア選択において、「希望」があるとほとんどの学生が語っていた。「希望」があると語る学生は、友人や教師など人との出会いによって動機づけられている。教師においては、部活動、学級、教科等の場面で影響を与えている。影響を与える教師は、「生きていく上での基本的な行動様式」⁽¹⁶⁾を含めた生き方についてモデルとなるようなものである。

第二として、「希望」がある学生は、挫折経験を持っていることに加えて、友人が多く存在し、社会的ネットワークを広げ、家族から期待された記憶を持っているという傾向が見られた。また、家族や親戚や学校の人間関係とは異なる友人や知人を持っており、それらの存在によって認められ、期待されることがキャリア選択において強い希望をもつことが示唆されている。さらには、挫折後には新たな希望を転換する上で、他者の関与とりわけ友人が重要であることが確認できた。友人の存在は、何らかの情報源になっていることは考えられるが、キャリア選択時においてどのように影響しているのか検証できておらず、その点については今後の課題である。

希望はなかなか実現するのが難しい。希望が叶わないことがわかると、強い希望をもっていた場合ほど、挫折も大きい。しかし、希望をもってその後に挫折を経験することで、初めて自分の可能性や適性を知ることができる。また、そこから希望の調整や軌道修正のプロセスを考えることができるのではなかろうか。日本の若者たちが自分の将来について悲観的な見方をしており、自己肯定感が極めて低いと指摘されている⁽¹⁷⁾。したがって、学生に自分の夢や希望について考えさせ、情報活用や意思決定の能力をつけるための学習活動に系統的に取り組むなど学習指導上の工夫が求められる。このようなことから、早期から職業観や将来の希望を育成させるような教育的指導が必要になっている。

参考・引用文献

- (1) スーパー-D.E. 日本職業指導学会（訳）『職業生活の心理学－職業経歴と職業的発達－』誠信書房1960年（Super, D.E. 1957 *The Psychology of careers—An introduction to vocational development—*New York : harper&brothers）。
- (2) 喜田裕子・高木茂子「大学生の進路（キャリア）をめぐる心理教育的支援に関する基礎研究」

- 富山国際大学『人文社会学部紀要』2002年2号、39－48頁。
- (3) 黒澤昌子・玄田有史「学校から職場へー「七・五・三」転職の背景」『日本労働研究雑誌』490号、2001年。
 - (4) 玄田有史「希望、失望、仕事のやりがい」『希望学』中公新書ラクレ、2006年、62－83頁。
 - (5) 島田修二「キャリア教育の実践 香川県立飯山高等学校」『進路指導』81巻5号、2008年、28－32頁。
 - (6) 玉井康之「生涯学習社会下における教員養成のキャリア教育としての教育フィールド研究の意義と内容ー釧路校の実践内容を中心としてー」『北海道生涯学習研究』73号、2007年、95－102頁。
 - (7) 玄田有史「若年無業の経済学的再検討」『日本労働研究雑誌』49巻10号、2007年、97－112頁。
 - (8) 大橋明、恒藤暁、柏木哲夫「希望に関する概念の整理ー心理学的観点からー」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』29巻、2003年、99－124頁。
 - (9) 橘川武郎「地方における希望、釜石市の経済活性化と第3次産業」東京大学社会科学研究所『社会科学研究』59巻2号、2008年。
 - (10) 北村晴朗『希望の心理学』金子書房、1983年。
 - (11) E.H. エリクソン村瀬孝雄、近藤邦夫（訳）『ライフサイクル・その完結』みすず書房、1989年。
 - (12) 山田昌弘『希望格差社会』筑摩書房、2004年。
 - (13) 柏木恵子「認知面及び情緒面における受験的圧力の影響に関する心理学的研究」1984年（昭和58年科学研究費成果報告書）。
 - (14) G・アラン、仲村祥一、細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社、1993年。
 - (15) 永井暁子「友だちの存在と家族の期待」『希望学』中公新書ラクレ、2006年、85－110頁。
 - (16) 西村絢子「教職課程選択学生に影響を与えた教師像について 日本教師学会編『教師教育の総括と21世紀の教師教育を展望するー教師の資質能力を問うー』2001年、114－122頁。
 - (17) 総務庁青少年対策本部編『世界の青年との比較からみた日本の青年-第6回世界青年意識調査報告書』1999年。